



TITLE:

「夢林玄解」の成立：雲なす證言

AUTHOR(S):

大平, 桂一

CITATION:

大平, 桂一. 「夢林玄解」の成立：雲なす證言. 中國文學報 2012, 82: 36-56

ISSUE DATE:

2012-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/217697>

RIGHT:

『夢林玄解』の成立

——雲なす證言——

太平 桂 一

大阪府立大學

第一章 夢林玄解という書物

『夢林玄解』は謎に満ちた書物である。『内閣文庫漢籍分類目録』子部七術數類^①には、「二三卷原集・論集・禳集各二卷 宋邵雍編 明陳士元補 明崇禎九序刊」と言っているのに對し、『四庫全書總目提要』卷一一一子部術數類存目二^②は、「明陳士元撰、何棟如重輯。……士元初めに夢書元解を作り、何棟如因りてこれを廣む。夢占二十六卷、夢禳二卷、夢原一卷、夢徵五卷に分かつ。前に凡例有り、是の書は宋の景祐間に在りては圓夢祕策と名づく、晉の葛洪の原本爲りて、宋の邵雍これを輯する者と稱す。其の言

は證據とす可き無し。又孫奭の序一篇有るも、辭氣は纖俗なり、蓋し術家依託の文にして、士元等辨ずるに及ばざるなり^③」と述べる。

ここで歷代の圖書目録から夢占いに關する書物を抜き出したリストをあげてみよう。

漢代

漢書卷三十藝文志

黃帝長柳占夢十一卷

甘德長柳占夢二十卷

右雜占十八家三百一十三卷

隋代

隋書卷三十四經籍志三 五行

占夢書三卷 京房撰

占夢書一卷 崔元撰

竭伽仙人占夢書一卷

占夢書一卷 周宣等撰

新撰占夢書十七卷 并目錄

夢書十卷

解夢書二卷

雜占夢書一卷梁有師曠占五卷、東方朔占七卷、黃帝太一雜占十卷、

和菟鳥鳴書、王喬解鳥語經、嘒書、耳鳴書、目瞶書各一卷、董仲舒

請禱圖三卷、亡。

唐代

舊唐書卷四十七經籍志下 五行

占夢書二卷

又三卷 周宣撰

新唐書卷五十七藝文志三 五行

周宣 占夢書三卷

又二卷

盧重元 夢書四卷開元人

柳璨 夢雋一卷

宋代

宋史卷二百六藝文志五 五行類

盧重元 夢書四卷

柳璨 夢雋一卷

『夢林玄解』の成立（大平）

周公解夢書三卷

王升 縮或無「縮」字 占夢書十卷

陳襄 校定夢書四卷

明代

明史卷九十八藝文志三 五行

張幹山 古今應驗異夢全書四卷

陳士元 夢占逸旨八卷 「存」

張鳳翼 夢占類考十二卷 「存」

四庫全書總目提要子部術數類存目二

紀夢要覽三卷 明童軒撰

夢占類考十二卷 明張鳳翼撰 「存」

夢林元解「元」は康熙帝の諱を避けたもので、「玄」に作

るべし」三十四卷明陳士元撰何棟如重輯 「存」

このリストにあがっている占夢書で、現存するものはごく少ない。「存」を付したもののみ存在を確認している。民間の占夢書の完本としては『周公解夢書』一卷が^④あり、敦煌文書の一つとして発見され、他の断片的な占夢書とともに翻刻されている。

このリストを見てとにかく言えるのは、歴代の占夢書はそのほとんどが滅んでしまっている事と、歴史上最大の規模を誇る占夢書が明末に突如出現したという事實のみである。その作者は或いは晉の葛洪であり、或いは宋の邵雍が編集したものを明の陳士元が補ったものであり、或いは陳士元が著したものを何棟如が更に編集したテキストである。また『四庫全書存目叢書』に收められている『夢林玄解』の巻首には、「夢林玄解三十四卷首一卷 明何棟如輯中國科學院圖書館藏明崇禎刻本」とあり、『四庫全書總目提要』と同様に非常に慎重な姿勢を示している。以下内閣文庫が所蔵する『夢林玄解』を内閣文庫本、社會科學院が所蔵する『夢林玄解』を社會科學院本と稱することとする。本稿では、『夢林玄解』の眞の作者を推定し、内閣文庫本と社會科學院本の二本の間にどのような違いが存在しているかを明らかにしていきたいと考える。

第二章 『夢林玄解』の作者は誰か？

雲をなしている證言を整理するために、『夢林玄解』に

冠せられているいくつかの序や引言の中で、『夢林玄解』の出自にかかわる言説を一つ一つ検討していこう。時系列に従い、宋の孫奭「圓夢祕策敘」、明の陳士元「夢林玄解小引」、李棟如「夢林玄解敘」、黃堂「夢論引」、夏昌「夢禳敘言」、李登「夢徵小引」の順に取り上げる。

(1) 孫奭の「圓夢祕策敘」

孫奭は、宋の太宗・眞宗・仁宗の三朝に仕えた名儒で、兵部侍郎・龍圖閣學士に至った。著書に『經典微言』『樂記圖』『五服制度』がある。孫奭の序に言う、「奭は愚患と雖も、正業自り外、凡そ醫藥星算、著占風鑑と夫の稗官雜載の書は、乞骸の後於り、一一寓攬せざる無し」^⑤。その彼が占夢書のみは讀んだことがないと嘆いていたところ、「丙子の春二月、偶ま蘭溪道上を経て、一羽衣に遇う。大篋を負い、地を畫して肆と爲し、符を賣り字を拆きて、曾て異傳を受けたりと大言す」^⑥。そこで舟に連れ歸り身の上を訊ねると、

某は弱冠自り家を棄て、天下を雲水すること、二十年

に垂^{なん}んとし、一叟に遇うを獲たり。蒼顏偉幹にして、廬山の石室中に僑居し、修真辟穀^{ひせき}す。私竊^{ひそか}にこれを恠^{あや}しみ、遂に進みて弟子の禮を執り、心を傾け節を折る者三載。叟忽ち某に謂いて曰く、汝の骨^{こつ}は凡に近く、我が侶^{ともがら}に非ざるなり。將に汝を去らんとす。汝事に勤めて日有るも、以て贈と爲す無きを惜しむ。祕書三策は、人間に久しく缺けたり、汝敬いてこれを珍^{たにいせつ}にすれば、以て名を立つるべし。妄りに洩發し、これを匪人に授くること母れ。徒らに譴^{とが}めらるのみならんと。示す所の書を啓^{ひら}くに、一策は則ち字を拆くを以て人の休咎を占い、一策は則ち符を書くを以て人の疾苦を療^いし、其の一策は是れ圓夢の訣爲り^⑦。

しかし、道士は三策のうち圓夢祕策を理解できず、使いこなす自信がなかったため、孫奭にそれを託すことになり、孫奭は圓夢祕策を世に公開することにした、というのが孫奭の序文の骨子である。末尾には「景祐三年四月上浣の休老人孫奭圓夢祕策の端に敍す」とあり、この文章は北宋仁宗の景祐三年丙子（一〇三六）に書かれたことになって

『夢林玄解』の成立（大平）

いる。『四庫全書總目提要』はこの文章を「辭氣纖俗」と評し、孫奭の作でないかと判斷している。この他にも孫奭の敍では、「甲戌の年」（一〇三四）夢で「戎服の力士」から丸藥をもらって呑んだこと等にも言及している。これらの記述は、眞宗の大中祥符の初めに天書が宮中に下り、君臣あげて瑞兆だと浮かれていた時に、下間を受けて「臣愚なり、聞く所は「天何をか言わんや」なり、豈に書有らんや？」^⑧と冷水を浴びせた孫奭の人となりに全く符合しない。もう一つの要素は孫奭の没年である。それはいくつかの資料から仁宗の明道二年（一〇三三）とわかるので、道士との遭遇も、序文の執筆もありえないことがわかる。これで孫奭の序文が僞物であることが確定した。この序文にはもともと圓夢祕策の内容に係わる記述はなく、僞物としても出来が良くないと言えよう。

（2）陳士元の「夢林玄解小引」

陳士元の「夢林玄解小引」は次のような記述から始まる。「余夢に感じて自り、撰して逸旨〔彼の著夢占逸旨を指す〕

を爲り、刻成りて、已に海内に行なわる。……甲子「嘉靖四十三年 一五六四」の春、一書を購い得、名は圓夢祕策と爲す。」^⑪孫奭の言う「圓夢祕策」と名前は同じであるが、陳士元は孫奭の序には一言も觸れず、意外な出自を明かす。「卷端に記有りて曰く、康節先生輯と。則ち宋の堯夫邵子の編む所疑い無きなり。但だ未だ其の何人に始まるやを知らざるなり。」^⑫つまり宋代の神祕學者邵雍の編集に係るとする。ところが管見の及ぶ限り、邵雍は『擊壤集』に収められているいくつかの夢を詠じた詩以外には夢に關わる著作はないのである。少なくとも藝文志や藏書目錄の類には著録されていない。にもかかわらず、「康節先生輯」だけを材料に邵雍の編集に「疑い無」しというのはあまりにも武斷にすぎるし、陳士元の普段の書き方 (écriture) とは根本的に異なっている。陳士元の略歴は『四庫全書總目提要』卷五經部易類『易象鉤解』四卷の項目によると、「士元、字は心叔、應城の人。嘉靖甲辰（三年 一五四四）の進士。官は灤州知州に至る。」^⑬であり、『易象鉤解』以外にも『五經異文』十一卷、『論語類考』二十卷、『孟子雜記』

四卷、『古俗字略』七卷、『古今韻分註撮要』五卷、『荒史』六卷、『夢林元』^⑭「玄」解三十四卷、『名疑』四卷、『姓觴』十卷が『四庫全書總目提要』に入っている。彼の著作は多少俗っぽいが、ほとんどが地に足が着いたものである。『四庫全書總目提要』には収められていないが、彼の著書として知られる『夢占逸旨』は、表面的には『夢林玄解』との關わりを持つように見える（實際に『夢占逸旨』の全體が『夢林玄解』にとりこまれている）。しかし、『夢占逸旨』は夢見のメカニズム、夢の類型等をきわめて眞摯に論じた書物であり、『夢林玄解』のような雑多なテキストとは隔然と異なっている。彼が『夢占逸旨』を書いた事情を説明している序文を見てみよう。

嘉靖壬戌（四十一年 一五六二）の秋八月既望、陳子蒲陽軒中に坐し、月色の漸く高きを睞りみ、桂華の始めて放くを忻び、盈虧の轉轂に感じ、榮瘁の循環を念う。是において酒を舉げ酌を命じ、興發し酣を成す。枕簟は清きを載け、隕然として寢に就く。皓眉の老叟、霞服を披て庭に降り、余に一函を授くを夢む。金文目を

眩まし、宛も蝌蚪の古篆のごとく、宣誦せんと欲するも未だ能わず。袖間に藏襲するも、猶お遺脱あらんことを恐る。玆の奇玩を獲て、心に復た疑いを生ず。乃ち再拜して叟に問いて曰く、余と君と遇うは、乃ち夢なること無からんやと。叟笑いて曰く、何の遇か夢に非ざらん、何の夢か眞に非ざらんと。忽ち譙きょうむる聲起こり、余遂よりて驚覺し、坐して喟嘆す、是れ何の祥なるやと。¹⁵

このような事情から、自分の持てる知識を總動員して内篇十篇、外篇十篇、全八卷の『夢占逸旨』を完成させたのである。繰り返しになるが、ここからは、「康節先生輯」を見ただけで、「宋の堯夫邵子の編む所疑い無きなり」と短絡的に斷定するような人物像はうかがわれない。もし陳士元がそのような人物であるならば、「金文」あるいは「蝌蚪の古篆」で書かれた占夢書を捏造してしまうであろう。さてここでもう一度「小引」にもどころ。先に引用した部分に續き、陳士元は言う、「卷帙は蝨銷し、敘識は漫滅す。僅かに占繇の尾に于いて、殘失せる數言、洪の私説に非ず

『夢林玄解』の成立（大平）

して、委たしかに源流有りの語有り。又咸康中の三字有り、諸を史傳に稽かへえ、厥の歲元を揅るに、又僊翁葛稚川の著す所に屬すること疑い無きなり。¹⁶問うに落ちず、語るに落ちるとはこのことである。繆荃孫が「粧奩の中」から「舊鈔本」を発見し、それを「京本通俗小説」と稱して出版した時も、その寫本は「破爛磨滅」と形容されていた。つまり、ある未知のテキストが発見され、それがボロボロな状態で見つかったと主張するのは、書物を捏造する際の常套手段と言えるのである。つまり、「葛洪原本」、「邵雍編纂」のテキストという「陳士元」の主張はあまりに荒唐無稽であり、「小引」の作者は陳士元ではないと推定する。陳士元は古人の著作を捏造するような人物ではなく、『夢占逸旨』全體が、『夢林玄解』にそのまま收容された時に無理矢理關連付けられてしまったのではないだろうか。

(3) 何棟如の「夢林玄解敘」

何棟如とはどのような人物であろうか？『明史』¹⁷卷二百三十七何棟如傳によると、無錫の人、字は子極、萬曆二十

六年（一五九八）の進士。二十九年に湖廣僉事の馮應京とともに汚職官吏の税監陳奉に誣告され、下獄した。襄陽の人々が北京に赴いて無實を訴えたが聞き入れられず、出獄したもの、士籍を削られて歸郷、十七年間蟄居していた。天啓年間の初めに、南京兵部主事に起用された。後に遼陽が陷落すると、義勇軍を募ることとなり、何棟如は志願してその事業にかかわり、「遂に帑金たすきを齎たすえて浙江に赴き、六千七百人を得」¹⁸たが、「募る所の兵は關を出るを畏れ、多くは逃亡す」¹⁹という結果に終わった。「棟如は志は鋭けれども才は疎く、初め浙に在りては、浮費無きこと能わす」²⁰と『明史』に評されるような些か浮ついた性格の人であつたらしい。後に政府高官を弾劾するなどして再び下獄し、流刑となった。崇禎の初めに原官に復したが、やがて致仕してなくなった。『明史』の記載からは彼と『夢林玄解』との接點を探し出すことはできない。しかし、彼には『文廟雅樂考』二卷、『皇明四大法』十二卷、（それぞれ『明史』卷九十六、九十七藝文志著録）などの著書があり、一種のブックメーカー的な存在でもあつた。彼の序文に耳を

傾けてみよう。

余の家三世、四たび國恩を受け、藏書略は具われり。邇ちかごろ歸田して自り、惟だ貯うる所の書籍を簡びて、披覽して日を消す。蠹餘の雜集中従り、偶ま一編を得たり。取りてこれを視れば、則ち夢書なり。繙閱して半ばを過ぐるに、これに託たくきて曰く、世に亦た是の書有るやと。何ぞ宇内寥寥として多くは見ざるや。而して余の先人獨り得てこれを藏し、余今偶ま得てこれを發す。豈に神祕泄れんと欲し、故に手を余に藉たするや」²¹「邇ちかごろ」とあるのは、崇禎の初年に原官に復した後、致仕して無錫に歸つてから、ということであろう。家藏の本の中から「またもや「蠹餘」とあるのが怪しいではないか。おそらく繆荃孫の場合同様、元の本を示しようがないのである」孫奭の序と陳士元の小引を冠した『圓夢祕策』を見出したのである。

簡端に宋學士孫奭序有り、以て原書八卷、内圖註一卷、これを蘭溪道士に得し者と爲すなり。次は則ち進士陳養吾（養吾は陳士元の號）なり。此の書は實に晉の仙翁

葛稚川の眞本、宋邵堯夫先生の輯する所なりと引述す。

陳公は則ち購羅哀集し、其の大觀を成せる者なり。^②

何棟如が「孫奭の序」と「陳士元の小引」を踏まえてここを書いてゐるのは明らかであり、孫・陳の文章を偽造したのは何棟如その人ではなかったかと推定される。ただし、何棟如はこの書がたったの八巻しかなく、その内容も夢占いに限られてゐるのを不満に思い、友人らと語らつて『圓夢祕策』の擴張を志したと主張してゐる。

遂にこれを出して紫水氏と詳參肆覽す。復た唐の雍氏載する所の禳解編及び張孝廉伯起輯する所の類考二書を得て、合併せて録成し、仍お玄解と名づけ、冠するに夢林を以てす。卷は二十有三に分ち、類は百五十有奇を列ね、集は四函に別つ。一は夢原、一は夢論、一は夢禳、一は夢占。蓋し謂らく、原無ければ是れ以て本源を探る無きなり。論無ければ猶お以て信從を明らかにする無きなり。禳無ければ是れ以て不祥を辟くる無きなり。占無ければ直ちに以て休咎を決する無きなり。此れ余と紫水氏の哀集して書を成し、陳公の未

『夢林玄解』の成立（大平）

だ備わらざるを廣むるの五指なり。^③

ここに登場してくる紫水氏とは、『夢林玄解』に收められている「夢論引」を書いた「紫水山人黃堂」を指す。「夢論引」については後述する。ここで初めて『夢林玄解』の全貌が見えたわけである。夢占は全二十三卷、一五〇餘りに分類されてゐる。全體の構成の順番は夢原・夢論・夢禳・夢占からなる。うち夢原と夢論は張伯起「夢占類考」に、夢禳は唐の雍益堅が著した禳解編に基づく、このように何棟如は説明する。書の構成に偽りは無いのだが、この記述には重大な誤りが二つある。まず、『夢占類考』は歴代の史書・隨筆・小説などから、吉凶の結果を伴つた夢を抜き出して來て、分類配列した書物であり、夢の理論には關係がないのである。何棟如の説明に關わらず、夢原・夢論の二篇は何棟如のグループが執筆・編集したものに他ならない。夢禳のもととなった「禳解編」の著者とされる雍益堅は、『酉陽雜俎』前集卷五怪術に「雍益堅云く、夜を主どる神咒、これを持すれば功德有り、夜行及び寐ぬるに、恐怖惡夢を已む可しと、咒に曰く、婆珊婆演底と」とある

ように、まじない師であった。『神咒經』一卷があつたというが未見である。何棟如がそれを目にした可能性は低いし、直接的な關係は薄いであろう。最後の夢占の部分も、先に述べた理由から陳士元の八卷本を二十三卷に増補したのでなく、彼らがすべて直接執筆したに違いない。つまり、全體が収められている陳士元の『夢占逸旨』を除けば、『夢林玄解』のどこを取ってみても前人の著作は殆んど無く、すべて何棟如のグループの手になるものである。成立年代は何棟如の序文の末尾にある「崇禎丙子一之日穀旦東吳の闇當居士何棟如來譽堂に書す」の通り、崇禎九年（一六三六）と推定される。

(4) 黃堂の「夢論引」

黃堂は何棟如の周邊にいた人だろうが、今のところ詳細はわからない。何棟如が「紫水氏」と稱しているように、號は「紫水」もしくは「紫水老人」。

甲戌の歲（崇禎七年 一六三四）問卿子極何公、家藏の夢林玄解一書を出し、不佞に訂參刪補を屬す。且つ益

に貯うる所の卷帙を發し、更に海内の遺編を購ひ、以て授けて曰く、書は一占に止まる。今宜しく附するに禳辟の説を以てすべし。蓋し惡を贈り吉を獻ずるは、周禮に昉まり、荒誕に非ざるなりと。不佞は唯唯たり。廼ち蚤夜簡閱す。一本は養吾（陳士元の號）の舊にして、駿明氏（夏昌を指す）の集むる所にして、心を悉して考較す。次は其の編目、其の蕪紊を芟り、其の缺略を裨おぎない、敢えて謬ちて己の見を附さず。亦た復た曩書の殘蠹の仏に非ざるなり。凡そ兩び霜汗を経て輯成⑤る。

崇禎七年に何棟如が「家藏」の陳士元輯『夢林玄解』とそれ以外の夢に關連する藏書、及び新たに購入した「海内の遺編」を黃堂に示して校訂・増補を依頼した。この段階の『夢林玄解』は「書は一占に止まる」とある通り、「夢占」だけであつた。その後『夢林玄解』の編集作業は「凡そ兩び汗霜を經」て二年で終了したのである。「夢論引」はさらに「夢原」と「夢論」のソースを明かす。「爰に凌虛張子輯む所の夢占類考に據りて、これを推廣し、兩つに

これを分かつ。一は夢論と曰い、往指を稽うるなり、一に夢原と曰い、繇來に遡るなり。^⑤この部分は何棟如の序と完全に一致する。繰り返しになるが、『夢占類考』と『夢林玄解』の「夢原」「夢論」は内容的に重なる所はなく、黄堂の記述はあてにならない。

ここまでの彼らの主張を整理すると以下のようになる。

＊夢林玄解（葛洪―邵雍―陳士元） 夢占のみ八卷。「葛洪

―邵雍」までは「圓夢祕策」と呼ばれており、陳士元の段階で「夢林玄解」と稱されるようになった。黄堂が二十三卷に増補。

＊夢論・夢原 黄堂が張伯起の『夢占類考』を二分して編集。

完成した『夢林玄解』を見た何棟如はこう言ったという。「岡卿見て喜びて曰く、庶幾いかな。以て寓内載籍の未だ備わらざる所を補うべく、長柳輝經の全きと雖も、當に是に過ぎざるべし。」^⑥つまり、古代の占夢書が完全な形で残っていたとしても、『夢林玄解』を凌駕することはない

『夢林玄解』の成立（大平）

だろうと斷言しているのである。これは後でも論ずるが、夢原に収められている「長柳自り出す」とされる数多くの圖が偽造であることを暗に言っているのだろう。

（5）夏昌の「夢禳敘言」

夏昌についても黄堂同様、今のところ詳細は不明である。末尾に「四明冲菴居士夏昌駿明氏、維揚の舟次に書す」とあり、「四明」から浙江省の人らしいことはわかる。「敘言」には、「夢禳」の成立に關わる記述は一切ない。「凡そ經史載籍暨寶笈靈編の、一たび禳夢に涉る者は採蒐して簡次成書せざる無しと云う」^⑦のように、經史に始まり、道教等の祕籍に取材して、惡夢祓いの記事はすべて收めたと言っており、非常に廣範な内容になっている。夢禳の中で特筆大書すべきは、歷代の書物に載ったことのない、惡夢の内容に即して描かれた多様な符籙と、易の理論と結びついた惡夢祓いのテキストである、「省夢須占易象說」と「六十四卦爻象辭」等の存在である。これで内閣文庫本すなわち崇禎九年刊本の夢原・夢論・夢禳・夢占のすべてが

そろった。これらの殆んどすべてが何棟如とその周囲の人々によって新たに創作されたと推定する。

ところが『夢林玄解』生成の物語がこれで終わるわけではなく、更なる展開を見せるのである。

(6) 李登の「夢徵小引」

さてもう一つの崇禎刊本である中國社會科學院圖書館藏本には、新たに李登の「夢徵小引」が加わっている。残念ながら李登の傳記も今のところ不明である。末尾に「白門老人李登」と自稱していることから、金陵の人と思われる。

「小引」に言う、「伯起張氏、夢に感じて病瘳え、編みて類考を爲る^{つづ}。其の採録は博く、其の敘述は精にして、其の用心は良だ^{はなは}苦^{ねんころ}なり。余は復たこれが爲に缺軼を補い、舛訛を訂し、全帙を彙成し、これに題して徵と曰う。」^⑧これによれば、夢徵は『夢占類考』を補い訂正したものということになる。實際に類考と夢徵を比較してみると、一致する項目は多いが、記述が異なっている場合が大半を占める。内閣文庫本と社會科學院本の最大の違いは大まかな目

次の立て方である。内閣文庫本は元集夢原・亨集夢論・利集夢禳・貞集夢占構成であり、社會科學院本は、夢占が巻首に來て、以下夢禳・夢原・夢徵の順に並んでいる。一見すると順番が變わっているのと、夢論が廢され、夢徵が加わっただけのようなのであるが、實はそうではない。そのことは後で論ずることとして、この「夢徵小引」がいつ書かれたのか確定しておかねばならない。その手がかりはやはり末尾にある。「戊申夏五白門老人李登書。」この「戊申」はどの年にあたるのか？候補は二つある。一つは明神宗の萬曆三十六年（一六〇八）であり、もう一つは清聖祖の康熙七年（一六六八）である。李登が何棟如の同輩とすると、第一の可能性も十分に考えられる。次の手掛かりは、社會科學院本にのみある夢徵の名數類の最後に付されている「皇明鼎元攷付」である。「皇明鼎元攷付」は文字通り明代の洪武年間から天啓年間までの狀元たちが、及第前に見た夢を記したもので、最後の一條が「文狀元信國面談」、すなわち天啓二年（一六二二）狀元の文震孟が文天祥の夢を見た記事である。「夢徵小引」の執筆時期が第一説の萬

曆三十六年と假定すると、この記事の日付と矛盾するため、「小引」の執筆時期は康熙七年ということになる。結論を言えば、中國社會科學院本は、これまで言われてきたように、「崇禎九年序刊本」ではなく、康熙七年序刊本ということがわかったのである。そこで社會科學院本に入っている何棟如序を見直すと、驚くべきことがわかる。何棟如の序文の終わり近く、『夢林玄解』の構成を説明しているところ。「卷は二十有三に分ち、類は百十有奇を列ね、集は四函に別つ。一は夢原、一は夢論、一は夢禳、一は夢占。蓋し謂らく、原無ければ是れ以て本源を探る無きなり。論無ければ是れ猶お以て信従を明らかにする無きなり。禳無ければ是れ以て不祥を辟くる無きなり。占無ければ直ちに以て休咎を決する無きなり。」これを李登は次のように書きかえる。「卷は三十有四に分ち、類は百五十有奇を列ね、集は四函に別つ。一は夢占、一は夢禳、一は夢原、一は夢徵。蓋し謂らく、占無ければ是れ以て休咎を知る無きなり。禳無ければ猶お以て不祥を辟くる無きなり。原無ければ是れ本源を探る無きなり。徵無ければ猶お信従を決す

『夢林玄解』の成立（大平）

る無きなり。」つまり、内閣文庫本が初めから夢占・夢禳・夢原・夢徵という構成になっていたかのような印象が讀者に與えようとして、社會科學院本の編集を行った李登が何棟如の序文を改竄したのである。このことを側面から裏付けるのは、「夢林玄解凡例」である。

(7) 夢林玄解凡例

内閣文庫本の夢林玄解凡例は六項目から成っている。

一、是の書は宋の景祐間自り出で、名は圓夢祕策、晉の葛稚川本爲り。繼いで嘉靖朝に輯せられ、名は夢書玄解、宋の邵康節本爲り、今崇禎丙子の冬に成る。蓋し前代の大成を集め、千古の祕藏を發し、且つ夢を彙めること林の如し。故に顔に夢林と曰い、玄解は則ち其の舊に仍ると云う。^⑧

この部分は『夢林玄解』の成立事情を何棟如の主張に従って説明したもので、社會科學院本も同内容である。第二の項目は次の通り。

一、總べて夢林と命づけ、中は四集に分かつ。首に夢

原を著わすは、厥の源委を捄り、用て理を明らかにするなり。次は夢論を輯す、名言を條列し、以て信を考うるなり。又次は精しく夢禳を授（授）し、參ずるに易トを以てするは、推準を佐くるなり。又次は廣く夢占を著し、比類して編み、簡研に便ならしむ。書は四岐せずして、一に玄解に歸するは、統有るを明らかにするなり。^②

この一段は内閣文庫本『夢林玄解』の構成が夢原・夢理・夢禳・夢占から成っていることを説明する。社會科學院本は最初の八字が同じだけで、あとは「首著夢占、比類而編、便簡研也。次附夢禳、參以易課、佐推準也。又次附夢原、條列名言、用明理也。又次附夢徵、稽人次代、以取信也。而卷不四岐、一歸玄解、明有統也。」であり、社會科學院本の構成である夢占・夢禳・夢原・夢徵に合わせて變更している。次は夢原に關する記述。まずは内閣文庫本。

一、夢原は首に占繇はじめを載す。本は稚川より出ずるも、久しく漫滅を經る。其の舊簡に従い、敢えて妄増せず。次は玉璣輝遺を述ぶ。作は叔徹自りし、歴れきだい攷據有り。

一えに其の故に仍るは、敢えて前賢の美を淹わざるなり。嗣ぐに二氣五神、盛衰傳變を以てし、圖說つぶさ具に載す。以て此の道に志有る者をして、沉研通慣に便ならしむ、庶幾ねがわくは、圓夢一術、茲に于いて復た振わんとを。^③

内閣文庫本では、葛洪の作とされる、「觀天地之會」に始まる十三條の占夢術の總論と、「晉の叔徹索」作の「玉璣輝遺」、陰陽二氣の盛衰によって見る夢が變化する八種類の「圖說」、心・脾・肺・腎・肝の五神の相關により、夢の吉凶が變化する十三種類の「圖說」「古代の夢書長柳に起源するとある」、五臟に對應する夢の事象〔例えば肝臟ならば鬪毆・刎殺・爭訟など〕、五臟に對應する物〔例えば肝臟ならば風・雷・橋・林木など〕を解説した章段が入っている。ところが社會科學院本では、「夢原」は解體されてしまつて、總論の部分は「夢占」の卷首に移され、二氣盛衰と五神は順番が逆になつて「夢占」の最後の方、卷二十四に移されている。それでは社會科學院本の「夢原」の内容はどうなつているのであるか？社會科學院本

の凡例を見てみよう。

一、夢原は、凡そ先朝の聖哲、歴代の名賢、互いに闡宣有り。其の或いは視て虚幻と爲し、寓言無夢等の語は、概して置きて録さず。茲に採る所の者は、上は素問六經二十一史六子百家自り外、下は魏晉唐宋名公の集に逮^{いた}る、苟くも夢と發明する者有らば、次第して編輯せざる無し。乃ち稗家の悠謬し、淫を宣べて根あらざる若きは、亦取る無きなり。これを攪る者をして聖賢の言を信じ、益ます占夢の術を信じること、厥の自りて來る有ら令むるに務めると云う爾^⑤。

歴代の聖賢の書や、有名人の言説から夢に關するものを取り出して並べ、後半は陳士元の『夢占逸旨』の全文が引用されている。つまり、これは内閣文庫本の「夢論」と全く同内容である。次は「夢禳」で、この部分内閣文庫本、社會科學院本ともに同文である。

一、夢禳の義は、周禮に起り、嫌疑を判決するに、復た周易に參す。其の説は躬を省み徳を修めるを以て主と爲し、呪勅はこれに次ぎ、符鎮はこれに次ぎ、藥物

『夢林玄解』の成立（大平）

解厭は又これに次ぐ。載せること星辰の寥落たるが若く、覽ること日月の昭明の如く、信心を辨^さうる者、至誠を積みて以てこれを行えば、自ら驗あらざる無し^⑥。

「夢禳」の主な内容は、夢を見たらその内容に關係なく、六個のコインを使つて易を立てることにより、吉凶を判定する「省夢須占易說」、惡夢祓いの呪文、惡夢の種別によつて使い分ける符録十種、惡夢を見た日によつて使い分ける符録十二種、三戸によつて起こる惡夢を祓う符録、惡夢を祓う藥物である。内閣文庫本の最後は「夢占」である。「夢占」の凡例は「夢禳」同様、二本ともにまったく同内容である。

一、夢占の舊刻は、直敘して書を成し、綱目を分かつたず、未だ尋覽に便ならず。必ずや俗本の如きは、韻語を編成し、反つて先賢の旨を失う。故を以て字句に拘らず、夢の短長に隨い、或いは夢を逐いて綱を提^あげ、或いは一綱にして數夢、或いは每兆に幾占、或いは一占にして幾兆、或いは占有りて即ちに附するに驗を以てし、或いは驗を載せて贅するに占を以てせず。その

間の詳略損益は互いに淵原有り。大約おおよそ新增に出る者は
 什の三、舊本を宗とする者は什の七、部類を剖別し、

聊か流覽に供す。領會貫通するは、自ら靈心に在らん。⁹⁶⁾

「夢占」は『夢林玄解』の中心部分であり、卷一「天象部
 一 天類 日月 星斗」に始まり、卷二十三「名數部 一
 名姓 奇名 異姓 定數 報應 雜驗」に終わる六七類に
 分かれ、四九二〇條の夢占いの項目を含んでいる。史上最
 大の規模を誇るだけでなく、シンボルの説明、占斷の論理
 (なぜ吉凶と判斷できるのか)の説明など、既成の類書には
 絶えて見られなかった記述が多々存在する。「必ずや俗本
 の如きは、韻語を編成し、反つて先賢の旨を失う。」とい
 うのは、歷代の日用百科全書、例えば『居家必用事類』丙
 集「夢寐因想」に入っている、「夢風吹衣疾病至」(夢に風
 が衣を吹かば疾病至る)などの七言の「韻語」を指すのであ
 る。「大約おおよそ新增に出る者は什の三、舊本を宗とする者は
 什の七」というのも興味深い。おそらく夢占の殆んどが
 「新增に出る者」であろう。このように書くことによって
 免罪符を得た氣になっているのだ。大盜が罪滅ぼしのため

に貧民のために開いた飯屋のようなものである。内閣文庫
 本は次の言葉で締めくくられる。

一、是の書は、搜剔廣遠にして、出るに機縁有り、輯
 は較だ辛繁にして、成るは苟簡に非ず。眞に蓋代以來、
 未だこれを恒には睹ざる者なり。且つ繡繪は精工、剖
 剗は審慎にして、目を具うる者これを珍たれにせよ。⁹⁷⁾

「眞に蓋代以來、未だこれを恒には睹ざる者なり」とはま
 さに皮肉そのものである。自ら捏造したのだから、「恒に
 睹」られなかったのは當然だろう。ちなみにこの部分は社
 會科學院本にはない。最後の署名は内閣文庫本では「霏玉
 樓主人翁元泰識」である。「翁元泰」は明末の蘇州で活躍
 した出版業者で、霏玉樓書坊という書肆をやっており、李
 攀龍の『詩韻輯要』等を出版した。⁹⁸⁾内閣文庫本の『夢林玄
 解』の封面にも次のようにある。

稚川葛隱翁祕本 夢林玄解 夢占一書、圖經は既に秦
 の炬に銷え、術業は漢儒に廢せられて、眞詮は睹るこ
 と罕に、殘本訛傳するに致る。茲に何岡卿先生家藏の
 晉葛仙翁祕本を出して、嚴に參訂を加え、全書を彙成

す。覽る者をして一夢有れば、必ず一占有り、一占有れば、必ず一驗有らしむ。誠に先聖の玄幾、高明の金鑑なり。具眼のひとこれを珍たいせつにせよ。南城翁少麓發行。³⁹

翁少麓は翁元泰と同一人物であらうし、字は少麓であると推定される。社會科學院本の夢林玄解凡例にはこの最後の一段は無く、そのかわりに「夢徵」についての記述がある。それを詳しく讀んでおこう。

一、夢徵。門を分かち部を別つ。而して門部の内に、又復た類分す。天象部は、天日に先んじ、形象部は首項に先んずの類の如きなり。類の中は各の世代の先後を以てこれを列ぬ。其の世代甚だ相い遠からざる者は、則ち正史を先にして諸家を後にす。大要は夢占一編と相表裏あひうらを爲す者なり。又芻狗鴛瓦、赤犬龍に化する解の若き有り。實事に非ざると雖も、亦た想因に係り、且つ記載據る有り、故に特にこれを存す。本朝の諸事に至りては、俱にこれを吾學編、皇明通紀、明興雜記、孤樹哀談諸書に採る、皆此れに先んじて已に

『夢林玄解』の成立（大平）

刊行を經し者なり。⁴⁰

この記述で面白いのは康熙の刊本であるにもかかわらず、「本朝の諸事」と言っている點である。先にも述べたが、社會科學院本の末尾には「皇明鼎元夢攷」という項目があるので、それを指しているのだろう。極めつけは社會科學院本『夢林玄解』の凡例の末尾の署名が「來譽堂闇當居士識」と、翁元泰から何棟如に變えられている事實である。何棟如の序の改編と同様、宛もそれが原本の凡例であるかのような錯覺を與えようとしている。ここにも社會科學院本の編集者李登の狡猾さがうかがえる。

今までにわかった内閣文庫本と社會科學院本の對應關係

内閣文庫本	社會科學院本
夢原	夢占卷首
	夢占（内容は内閣文庫本の夢占に同じ）
	夢占卷二十四、二十五
夢論	夢原（内容は内閣文庫本の夢論に同じ）
夢禳	夢禳
夢占	夢徵

を整理しておく、以下のようになる。

第三章 結 論

『夢林玄解』の成立については、大體次のようにまとめることができるであろう。

①内閣文庫本（崇禎本）の編輯者は何棟如を中心とするグループであった。何の他には夏昌、黃（夢）堂がいた。出版したのは蘇州の翁元泰。「夢林玄解凡例」に署名していることから、編輯に深くかわっていた可能性もある。葛洪原本、邵雍輯の『圓夢祕策』はもちろん架空の書物であり、孫奭の序も捏造された。陳士元の關與はなく、その名が冠せられたのは、彼の『夢占逸旨』が夢論に丸々収められた縁による。もちろん陳士元の「小引」も偽作である。

②社會科學院本の編輯者は李登であり、刊行は康熙年間。彼は夢原を解體して夢占の前後に配し、夢占を先頭にもってきた。夢論を夢原と改稱した。夢禳の後に自分が書いた夢徵を置き、數合わせを行った。自らの康熙年間刊本を原本と思わせるために、李棟如の序文、凡例に手を入れた。

『夢林玄解』が中國の占夢史上ユニークな存在であることは言うまでもないが、それ以上に中國精神史上に持つ意義は巨大である。明末清初に存在した夢に關する言説を集成した本書はまさに空前絶後の書物であり、以後内容を詳しく紹介し、全體の翻譯をも試みていきたいと考える。

註

- ① 内閣文庫（現國立公文書館）一九五六年刊
- ② 中華書局景印浙江杭州本 一九八二年第二次印刷
- ③ 原文は以下の通り。「明陳士元撰、何棟如重輯。：士元初作夢書元解、何棟如因而廣之。分夢占二十六卷、夢禳二卷、夢原一卷、夢徵五卷。前有凡例、是書在宋景祐間名圓夢祕策、爲晉葛洪原本、而宋邵雍輯之者。其言無可證據。又有孫奭序一篇、辭氣纖俗、蓋術家依託之文、士元等不及辨也。」
- ④ 敦煌本夢書 鄭炳林羊萍編集世界文化出版社 一九九五年刊
- ⑤ 原文は以下の通り。「雖奭蠢愚、自正業而外、凡醫藥星算、著占風鑑、與夫稗官雜載之書、於乞骸之後、無不一一寓攬焉。」
- ⑥ 原文は以下の通り。「丙子之春二月、偶經蘭溪道上、遇一羽衣。負大篋、畫地爲肆、賣符拆字、大言曾受異傳。」

⑦ 原文は以下の通り。「某自弱冠棄家、雲水天下、垂二十年、獲遇一叟。蒼顏偉幹、僑居廬山石室中、修真辟穀。私竊恠之、遂進執弟子之禮、傾心折節者三載。叟忽謂某曰、汝骨近凡、非我侶也。將去汝。惜汝勤事有日、無以爲贈。祕書三策、人間久缺、汝敬珍之、可以立名。毋妄洩發、授之匪人、徒被譴耳。啓所示書、一策則以拆字占人休咎、一策則以書符療人疾苦、其一策是爲圓夢之訣。」

⑧ 『宋史』卷四百三十一孫奭傳。『宋史』は中華書局排印本を用いた。原文は以下の通り。「臣愚、所聞天何言哉、豈有書也？」

⑨ 宋人の隨筆を讀むと、しばしば超現實的な出來事が記述されているが、それらはあくまで親族、知人といった他人の體驗であつて、本人の體驗を描いたものはほとんど無いと言つてさしつかえない。

⑩ 『歷代名人年里碑傳總表』姜亮夫撰 臺灣商務印書館 一九七五年刊。

⑪ 原文は次の通り。「余自感夢、撰爲逸旨、刻成、已行海內矣。……甲子之春、購得一書、名爲圓夢祕策。」

⑫ 原文は次の通り。「卷端有記曰、康節先生輯。則爲宋堯夫邵子之所編無疑。但未知其始于何人也。」

⑬ 二首の詩を以下に挙げる。卷三の夢中吟には「夢中 夢を説きて猶お能く憶う、夢より覺めて夢中還お又た隔たる。今日の恩光空しく喜歡、當年の意愛 尋覓^{たづね}ね難し。水流れと成

る處^{ところ}。豈に聲無からんや、花謝^{はな}むに到る時 安んぞ色有らんや。此れを過ぎて相い逢う陌路の人、都べて元來曾て相い識るが如し」とあり、卷十三の「畫夢」には「夢裏 鄉關に到る、鄉關 二十年。依稀たり新國土、隱約たり舊山川。身は已に煙霞の外、人家は道路の邊。覺め來りて猶お目に在り、一餉^{ひとす} 但^{ただ}ら蕭然たり」とある。『伊川擊壤集』の引用は四部叢刊所收本に據った。

⑭ 原文は次の通り。「士元、字心叔、應城人。嘉靖甲辰進士。官至灤州知州。」

⑮ 原文は次の通り。「嘉靖壬戌秋八月既望、陳子坐蒲陽軒中、睇月色之漸高、忻桂華之始放、感盈虧之轉轂、念榮瘁之循環。於是舉酒命酌、興發成酣。枕簟載清、隤然就寢。皓眉之老叟、披霞服而降庭、授余一函、金文眩目、宛蝌蚪之古篆、欲宣誦而未能。藏襲袖間、猶恐遺脫。獲茲奇玩、心復生疑。乃再拜而問叟曰、余與君遇、無乃夢乎。叟笑曰、何遇非夢、何夢非眞。忽起譙聲、余遂驚覺、坐而喟嘆、是何祥也。」『夢占逸旨』の引用は陳士元撰『歸雲別集』所收本を用いた。なお『夢占逸旨』については、清水洋子氏による優れた論考、譯注がある。（『夢占逸旨』外篇について）待兼山論叢第三十八號哲學篇『夢占逸旨』にみる陳士元の夢の思想——「眞人不夢」をめぐる——『東方宗教』第百五號「陳士元『夢占逸旨』の占夢理論とその構造——『周禮』の占夢法との關係から——」中國語中國文化第五號、「陳士元『夢占逸旨』内

篇譯注(一)「同(二)」同(三)中國研究集刊生號、出號、麗號)

⑮ 原文は以下の通り、「卷帙蝨銷、敍識漫滅。僅于占繇之尾、殘失數言、有非洪私說、委有源流之語。又有咸康中三字、稽諸史傳、揆厥歲元、又屬僊翁葛稚川所著無疑矣。」

⑯ 中華書局排印本を用いた。

⑰ 原文は以下の通り、「遂齋帑金赴浙江、得六千七百人。」

⑱ 原文は以下の通り、「所募兵畏出關、多逃亡。」

⑲ 原文は以下の通り、「棟如志銳而才疎、初在浙、不能無浮費。」

⑳ 原文は以下の通り、「余家三世、四受國恩、藏書略具。邇自歸田、惟簡所貯書籍、披覽消日。從蠹餘雜集中、偶得一編、取而視之、則夢書也。繙閱過半、詫之曰、世亦有是書耶。何字內寥寥、不多見也耶。而余先人獨得而藏之、余今者偶得而發之。豈神祕欲泄、故藉手於余耶。」

㉑ 原文は以下の通り、「簡端有宋學士孫奭序、以爲原書八卷、內圖註一卷、得之蘭溪道士者也。次則進士陳養吾。引述此書、實晉仙翁葛稚川真本、宋邵堯夫先生所輯。而陳公則購羅哀集、而成其大觀者也。」

㉒ 原文は以下の通り、「逐出之、與紫水氏、詳參肆覽。復得唐雍氏所載禳解編、及張孝廉伯起所輯類考二書、合併錄成、仍名玄解、冠以夢林。卷分二十有三、類列百五十有奇、集別四函。一夢原、一夢論、一夢禳、一夢占。蓋謂、無原是無以探本源也。無論猶無以明信從也。無禳是無以辟不祥也。無占

直無以決休咎也。此余與紫水氏裒集成書、廣陳公所未備之大指也。」

㉓ 方南生點校中華書局排印本一九八一年刊。原文は以下の通り。「雍益堅三、主夜神咒、持之有功德、夜行及寐、可已恐怖惡夢。咒曰、婆珊婆演底。」

㉔ 原文は以下の通り。「甲戌之歲、問卿子極何公、出家藏夢林玄解一書、屬不佞訂參刪補焉。且益發所貯卷帙、更購海內遺編、以授曰、書止一占。今宜附以禳辟之說。蓋贈惡獻吉、昉乎周禮、非荒誕也。不佞唯唯。迺蚤夜簡閱。一本養吾之舊、與駿明氏所集、悉心考較。次其編目、芟其蕪穢、裨其缺略、不敢謬附己見。而亦非復曩書之殘蠹丛矣。凡兩經霜汗輯成。」

㉕ 原文は以下の通り。「爰據凌虛張子所輯夢占類考、而推廣之、兩分之。一曰夢論、稽往指也、一曰夢原、邇繇來也。」

㉖ 原文は以下の通り。「問卿見而喜曰、庶幾哉。可以補寓內載籍所未備、雖長柳輝經之全、當不過是矣。」

㉗ 原文は次の通り、「凡經史載籍暨寶笈靈編、一涉乎禳夢者、無不採蒐而簡次成書云。」

㉘ 原文は次の通り。「伯起張氏、感夢病瘳、編爲類考。其採錄博、其敘述精、其用心良苦。而余復爲之補缺軼、訂舛訛、彙成全帙、題之曰徵。」

㉙ 原文は以下の通り。「卷分三十有四、類列百五十有奇、集別四函。一夢占、一夢禳、一夢原、一夢徵。蓋謂、無占是無

以知休咎也。而無禳猶無以辟不祥也。無原是無以探本源也。而無徵猶無以決信從也。」

- ③① 原文は以下の通り。「一、是書出自宋景祐間、名圓夢祕策、爲晉葛稚川本。繼輯於嘉靖朝、名夢書玄解、爲宋邵康節本、今成於崇禎丙子之冬。蓋集前代之大成、發千古之祕藏、且彙夢如林焉。故顏曰夢林、而玄解則仍其舊云。」

- ③② 原文は以下の通り。「一、總命夢林、中分四集。首著夢原、揆厥源委、用明理也。次輯夢論、條列名言、以考信也。又次精史夢禳、參以易卜、佐推準也。又次廣著夢占、比類而編、便簡研也。而書不四岐、一歸玄解、明有統也。」

- ③③ 原文は以下の通り。「一、夢原、首載占繇。本出稚川、久經漫滅。從其舊簡、不敢妄增。次述玉璣輝遺。作自叔微、歷有攷據。一仍其故、不敢淹前賢之美也。嗣以二氣五神、盛衰傳變、圖說具載。以便有志此道者、沉研通憤、庶幾圓夢一術、于茲復振云。」

- ③④ 原文は以下の通り。「一、夢原、凡先朝聖哲、歷代名賢、互有闡宣。其或視爲虛幻、寓言無夢等語、概置不錄。茲所採者、上自素問、六經二十一史六子百家而外、下逮魏晉唐宋名公之集、苟有與夢發明者、無不次第編輯。若乃稗家悠謬、宣淫不根、亦無取焉。務令攬之者、信聖賢之言、益信占夢之術、厥有自來云爾。」

- ③⑤ 原文は以下の通り。「一、夢禳之義、起於周禮、而判決嫌疑、復參周易。其說以省躬修德爲主、呪勸次之、符鎮次之、

藥物解厭又次之。載若星辰之寥落、覽如日月之昭明、辦信心者、積至誠以行之、自無不驗。」

- ③⑥ 原文は以下の通り。「一、夢占舊刻、直敘成書、不分綱目、未便尋覽。必如俗本、編成韻語、反失先賢之旨。以故不拘字句、隨夢短長、或逐夢提綱、或一綱數夢、或每兆幾占、或一占幾兆、或有占而即附以驗、或載驗而不贅以占。其間詳略損益、互有淵原。大約出於新增者什之三、宗於舊本者什之七、剖別部類、聊供流覽。領會貫通、自在靈心。」

- ③⑦ 原文は以下の通り。「一、是書搜剔廣遠、出有機緣。輯較辛繁、成非苟簡。眞蓋代以來、未之恒睹者也。且繡繪精工、剗劂審慎、具目者珍之。」

- ③⑧ 漢籍データベースを検索すると、『詩韻輯要』五卷、明李攀龍原輯明陳繼儒重訂 江戸期京都梅村彌白據萬曆四十二年書林翁元泰重刊 東大總合」とある。

- ③⑨ 原文は以下の通り、「稚川葛隱翁祕本 夢林玄解 夢占一書、圖經既銷秦炬、術業復廢于漢儒、致眞詮罕睹、殘本訛傳。茲者何岡卿先生出家藏晉葛仙翁祕本、嚴加參訂、彙成全書。俾覽者有一夢、必有一占、有一占、必有一驗。誠先聖之玄機、高明之金鑑也。具眼珍之。南城翁少麓發行。」

- ④① 原文は以下の通り。「一、夢徵。分門別部。而門部之内、又復類分。如天象部先天于日、形象部首先于項之類。類中各以世代先後列之。其世代不甚相遠者、則先正史而後諸家。大要與夢占一編相爲表裏者也。又有若芻狗鴛瓦、赤犬化龍之解。

雖非實事、亦係想因、且紀載有據、故特存之。至于本朝諸事、俱採之吾學編、皇明通紀、明興雜記、孤樹裒談諸書、皆先此已經刊行者矣。」

付記

本論文完成後、清水洋子氏から「『夢林玄解』小考——構成と編集意圖（中國語中國文化第八號二〇一一年三月）を惠與された。成立論に関しては社會科學院本のみを材料に論を立てているので、拙論とはかなり結論が異なる。『夢林玄解』の編集意圖を丁寧に論じた部分は非常に面白く、拙論と併せ讀まれることをお勧めする。」